

創部50年記念誌発刊にあたりて

千歳高校ラグビークラブ会長 杉本要二

平成8年は千歳高校ラグビー部にとって輝やかしき50周年にあたります。人の一生の内、一番成長する時期、一番活力を蓄積出来る時期、旺盛なるファイティングスピリットに点火、燃焼し続けられる時期が中学生、高校生の時であるとするならば、この時期に千歳のグラウンドに於いて、ひたすら楯円の球を追い続け、身を挺してタックルにあけくれてラグビーに集中出来た者は、何と素晴らしい時を持てた事でありましょうか。長かった戦争が敗戦と云う形で終わりを告げ、日本中がその悲哀にうちひしがれていた昭和21年、4期生・5期生が中心となって、それこそ数々の障壁を乗り越えてラグビー部を誕生させたのであります。たった一個の、それも皮が伸びて楯円と云うよりは、丸に近いラグビーボールを大事に大事に扱ながら、基本練習に明け暮れた創部当時の苦節の話は、余りにも有名であります。この先輩達のなみなみならぬ努力が、昭和24年に見事に開花し、宿敵高崎高を激戦の末うち破り、晴れの高校全国大会に駒を進めたのでした。以来、東京は勿論の事、関東に千歳有りを全国の高校ラグーマンにその名を意識づけ、その戦績が目されるに至ったのであります。更に昭和26年の全国大会にも二回目の出場を果たし、千歳の知名度を確固たるものとししました。その後数年間は東京、関東に於いて強豪ぶりを発揮し伝統の千歳とまで評されるに至ったのであります。この間の戦績については、各期からの寄稿にもりこまれて、本記念誌をより重みのあるものにしていくと思っております。

この様にその時その時の現役の頑張りにより、千

歳と云えばラグビー、千歳の校技はラグビーと迄云われてまいりましたが、時代の傾向と云うのか、進学の問題もあってなのか、徐々にその印象が薄れはじめ、誠に残念な事ですが、ここ3~4年に於いては部そのものの存続が不能となり、毎年の大会にも出場できない状態となって参りました。今、全国的な傾向として、高校生のラグビー離れが見受けられ東京都の登録校数も減少しており、今年に於いては、114校から109校となり、この内新人大会に出場できたのは64校、10人制の大会で漸く96校が集まるのが現状であります。数字的な事は兎も角、残念な事は、同じ都立高校で千歳とほぼ同じ時期に創部した学校が立派に15人制の大会に出場し続けている事実を見、何で千歳が……と云う思いで誠に残念無念の思いをしているのです。

今回、創部50年を迎え、その記念誌を編集するにあたり、何よりも強く希望する事は、在校生諸君の内から、輝かしい部の戦績を知り、伝統の重みと云うものを感じとって、再興の気運を盛り上げて、再び千歳高校ラグビー部の名を、全国に覇せる事を切に祈る次第であります。

最後になりましたが、半世紀に亘る千歳ラグビーの歩みを綴ったこの記念誌を共に手にとって読み、想い出話に花を咲かせるべきこよなくラグビーを愛し、情熱を傾注した幾人かの球友が誠に残念ながらすでにこの世を異にする処に旅立って居られます。慎んでその御冥福を祈りつつこの記念誌を捧げたいと想います。